三河アララギ

２０２５年 令和７年２月 如月（きさらぎ）

二　月　号

第 七十二 巻　　第 二 号

ニューヨーク日記（220）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

HAPPY 2025!

Blue Shoe Diaries

マイアミからハッピーニューイヤー！毎年ご近所さんが（勝手に）プロ級の花火ショーを披露してくれるのが恒例になっていますが、家のバルコニーは特等席！花火が目の高さで開き、夜空を鮮やかな色とエネルギーで満たしてくれます。新しい年を迎えるには、これ以上ないほどダイナミックで素晴らしい瞬間！良い年のなると良いな！

Happy New Year from Miami! Every year, our neighbors outdo themselves with an incredible, professional-level fireworks show to ring in the New Year, and we're lucky enough to have the best seat in the house. From our balcony, the fireworks bloom right at eye level, filling the night sky with dazzling colors and energy. It's a breathtaking and dynamic way to welcome the year ahead!

目次

第七十二巻第二号（通巻八五四号）

表紙・ジャックフルーツ（1）
ニューヨーク日記(220)　Blue Shoe（2）　御津　磯夫（4）
歌集　わが冬葵　今泉　米子（5）
歌集「草々」　大須賀寿恵（6）
はははきくさⅢ　夏目　勝弘（7）
二〇一八年二月号より　岡本八千代（8）
『歌集　八千代』　弓谷　久子（10）
よみがえりくる　今泉　由利（12）
水平線　安藤　和代（14）
冬陽射す　山口千惠子（16）
ヒヤシンス　杉浦恵美子（18）
大晦日　伊藤　忠男（20）
年忘れ　白井　信昭（22）
庭中改修（その十一）　矢崎　直人（24）
元日や
『ことよせ』　いーはとぶ　稲吉　友江（26）
鈴木美耶子（26）

現代学生百人一首　東洋大学
恩田　優奈（30）
澤田　拓実（30）
赤間　夏妃（30）
川本　美瑛（30）
佐藤　杏菜（31）
橋本　大和（31）
大竹　恭平（31）
石川　胡桃（31）
植村　公女（32）
木村　歩歩（32）
今泉　如雲（32）
矢崎　直人（33）

牧原　正枝（27）
森　厚子（27）
水野　絹子（28）
牧原　規惠（28）
大武　智子（29）
『俳句』
今泉　由利（33）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（34）
折々の詩（十二）　ふじのけんじ（36）
五感を澄ませば(32)　杉浦恵美子（38）
附録（三十二）　矢崎　直人（40）
『大河ドラマ』　中屋　保之（42）
『酔いの徒然』（154）　丸山酔宵子（44）
「花よ風よ光よ」　高橋　育郎（46）
絹の話（171）　今泉　雅勝（48）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（50）
初狩便り39　花野みぷり（52）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
本田　勇気（54）
康鍼治療院　玄　翁　（56）
台上偶作　殿山　木風（58）
編集室だより　今泉　由利（60）
「三河アララギ」について　（62）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

吉祥草（きちじやうそう）といふ名よろこび欲ばりて株分け植うるいくところにも
散りのこるさくら黄葉の幾片の吹かれ危ふきを目守りつつゐる
生まれましし家跡の土に咲きいでし黄菊に父の忌を莊嚴（しやうごん）す
木瓜呆（ぼけほ）けて咲く十一月の秋晩（おそ）く忌の日はめぐる父母（ちちはは）の祖母（そぼ）の
はらからはいまだ一人も缺けずともみな老い痴れてよよむ七人
草や木や好み樂しみ培ひて植物人間などになるなよ
悲しかる第三世界の汗によりてレジャーをこぞり樂しみてゐき
國の内に湧出（ゆうしゆつ）せざるを浪費させ煽（あふ）りの罪は誰れが受くべき
賃上げもストも買ひだめも出來ずしてわれらに寒き冬の來むかふ
われらつねに守り來れる節約をいまさら美德とおとどらはいふ

歌集「草々」

今泉米子

秋篠の秋の庭よりつまみ來しヒメクラマ苔鉢に生きつつ

花柘植の花終りたる庭の上鉢にひそけし秋篠の苔

掌にのせて見る鉢の苔秋篠の端のみどりのセイタカスギ苔

ひとつまみの苔の中より秋篠の春の穂草の條たつあはれ

鉢の中の秋篠の苔より萌え出でて絲より細く穂にたちなびく

スギ苔にヒメクラマ苔寄りあへりクラマ苔には花らしきもの

秋篠のみ佛のみ名忘れつつ缺けたる鉢のセイタカスギ苔

秋篠のクラマ苔スギ苔かたまりてめぐりにゼニ苔はびこりはじむ

スギ苔はクラマ苔よりみどり濃く立ちいきほへり缺けし鉢の底

鉢の中に生きづく苔の濃みどりの瑞のみどりの苔とこしへに

はゝきくさⅢ

大須賀寿恵

よどめるが如き朱き太陽よ稲村山に今沈まむとする
寝返れば寝返る方につきまとふわがうつし身の鈍き痛みは
露草は池のめぐりにはびこりて浮草のごとくたゆたふもあり
水引の花も醜草と除りてゐる人を見てをりただに黙して
十年あまりスモン病みつつカルテまで調べて告訴の意(こころ)はもたず
毎食後飲みゐる丸き安定剤わが吐く呼気にいたく臭ふも
硝子戸を開け放ちゐるわが部屋に露草つたひてトカゲ入り来ぬ
人の訪ふ声しきりなりひろげたる掌を握るさへたゆき朝に
スモン病み九年過ぎつつ左眼の視力は〇・二となつてしまひぬ
スモンの足引きつつ行けば稲田の上蜻蛉ら強き風にさからふ

二〇一八年二月号より

夏目勝弘

台風にて倒れ地に伏し花咲かすコウテイダリヤを見下ろしてゐる

庭すみを閉めてはんなりユウゲショウ淡き紅色冬紅葉なし

裸木となりしネムに寒ざむと空の莢実の揺れざるあした

十二月の三十日の空高し飛行機雲の跡絶えることなし

今朝ならば本宮山より富士山がクッキリ見ゆると思ひに浮ぶる

墓原への道を歩む前方の己の影と現人の我と

早朝の埋葬地に霜柱を踏み砕きゆく音のみの世界

木漏日のスポットライトなすなかに千両の実の赤ががやく

五尺余の我が背丈の倍はある己の影が冬田に伸びる

新玉の年への思ひうすれきぬ産土の社へ〆縄を納む

『歌集　八千代』

蒲郡　岡本八千代

三河の海の岬の町にわが生まれ生まれたる町の女教師われは

転出の内示を受けしこの夕べ春の雨ふるいよいよはげし

式花の松未だ残れるかたはらに退任挨拶の順を待ちをり

わが小さき名刺の勤務地西浦を消して形原と今宵なほさむ

九年間にたまりしわれの雑綴夕べをいでてひとり焼き捨つ

女教師のわれを女教師の君ひとり靴はくところまで送りてくれぬ

転任の挨拶まはりに来し家の散りたまる椿の花ふまずゆく

移り来し形原中学も教室より大島小島の海の見えをり

中学教師となりて十二年女教師われやうやく再びクラス担任となる

移り来し形原中学の生徒らになづなを教へむなづなを探す

道に沿へる校庭の土手に生ふる雑草見ればなづなばかりなり

生徒らの書きてくれたる分団地図にわがたどりゆく家庭訪問

七分団前野の地図はわかりにくし道なきところにも生徒の家あり

金平（かなひら）の水なき大池を巡りゆく家庭訪問二日目の今日

三ケ根山のま近く見ゆるに早く馴れて緑の長き廊下を歩く

よみがえりくる

豊川　弓谷　久子

音立てて大き枯葉が道に舞ふけやき並木に人影も無し

キルテングの伴天縫ひたり母の如く我を想ひてくれる人に

ほのぼのとよみがえり来る歌会にて三河アララギ賞戴きし日よ

休まずに三河アララギ一筋なりき御津先生の門下生として

寿恵先生と靜誠様が声揃えわらべ歌歌ひし日もありき

パン食の朝餉にかかせぬ苺ジャム我の自慢の味に煮込まむ

クリスマスイブとケーキ届きたり代りに苺もたせてやらむ

モンブラン子と分け合ひぬ昔より我の一番大好きな味

つきたての餅を今年も届けると笑顔で君は帰りゆきたり

五十肩の痛み互にかこち合ふ六十の子と九十の我と

水平線

東京　今泉由利

飛行機の小さき窓に五つ六つ雨粒宿し飛び発たむとす

マイマミへ行かむ飛行機の座席中あのことこのこと甦りくる

まつ暗になりたる日本の景色の中を飛びい出(だ)しますマイアミ向けて

マイアミの大き星空見あげつつ宇宙のほんのいち少部分

より速くより遠くへと真地球を見下ろしてゆく目的地

朝まだきブルトーザーの砂浜掃除素足を守る守られゐたり

見ゆるもの一番奥の地球のまるみたずさえた水平線を私の窓

どの方に日本国はあるかしらさらさらさらさら磯砂をゆく

さらさらと素足にやさしかった砂決を思い出している真暗闇

明日もまた朝日と共に輝けるそのぬくもりとその輝やきと

迷子になったらもう帰れないアマゾンジャングルうろうろしたりき

目に見えぬ物質の存在よダークマターにうずもれゐると

ただ単に地球に生きてゐることにあのことこのこと加はりきたり

朝の陽は水平線よりのぼり来しそして私のベッドに到る

地球なるまろみもちをり水平線地球に生きていることよ

冬陽射す

豊川　安藤和代

冷やかな朝の庭に山茶花の小さくピンクが綻び初む

〆切の早まるアララギ詠草の歌材探すも空深き青

立派です亡妹と同名「正代」よ負け越しなれど頑張りよろし

二千歩を気の進まない日もあればアメ玉二つポッケに歩む

庭の菊褒めゆく女の尚更にその心こそ美しと思う

姉妹か夫婦なるや梅の枝雀の二羽がひと日遊びて

友からの次郎柿ガブリ老の歯に友の心の味のあふるる

百才で逝きし隣りの小母ちゃんの木の葉が吾れの玄関に舞ふ

常薬を飲むを忘るる日もありて認知なからん健康なるぞ

結果よりその努力こそ大切と自分に言いつつ数独を解く

冬陽射す暖き網戸に蟷螂の肌色鈍く動ず事なし

真昼間の初冬の空にドクターヘリ音高らかに西へ去りゆく

病人かケガか幼か老人か思いめぐらしヘリを見送る

静けさが孤独に変わる日暮れどきややぬるめなる紅茶をすする

冷え増せば熱きお鍋が恋しくて大き白菜ザックリと割る

ヒヤシンス

豊川　山口千惠子

たちまちに白き根長く伸びてきぬ水栽培のヒヤシンスの球根

静かなる鎮守の杜の空高くたゆたひ三羽鳶めぐりゐる

手入れされず荒れ放題の隣り畑鬼柚一つぶら下がり成る

枝にさす蜜柑に小鳥今日も来ず師走あたたか風も吹かざり

白き根を長々伸ばすヒヤシンス冬の日さす瓶に青き芽は未だ

太りたる大根えらび抜き取りぬ穏やかにすぎし夕べの畑に

窓染めて真っ赤な太陽沈みゆく何ごともなく師走の十日

刈り込みし垣根を透し朝日さす温々の光り背に受けながら

ジョウビタキ今年も来たりわが庭に暫し見て立つ忙しげな動き

葉の落ちて蕾あらはになりて見ゆ冬日の中の白木蓮

花散りし皇帝ダリアを切り倒す安々切るるわが鋸にても

縮れつつその葉くろぐろ皇帝ダリア寒波の来たりて一夜のうちに

秋ジャガを掘りたる跡の土均らす春には植ゑむ物おもひつつ

今は亡き友のことなど想ひたり伸びたる槙の生け垣の家

隣人は介護施設に入りて久し無人の家に冬日あまねし

大晦日

蒲郡　杉浦恵美子

庭に出て咲き始めたる山茶花をぼんやり眺む年の瀬なのに

家族なき大晦日などすることも大してないわ玄関を掃く

用のなき庭には知らぬ間藤の葉が吹き溜まりてる音立てて掃く

ああそうだこの一年は何故かしら庭に心が向かはなかった

この夏の猛暑に庭など出でぬ間に垣根の何本枯れてしまひぬ

改めて庭に向かへば此処かしこハナニラ幾もと芽吹いて居りぬ

籠幾つも食材求むる夫婦ありつい我が籠見る暮れのスーパー

去年には曲がりなりにもおせちなど作りもしたり今年はもうよい

正月の支度は家族来客がありてこそぞとしみじみ思ふ

大晦日厨の灯り早々と消してしまひぬおせちも作らぬ

我が夫は最後の正月我が為に雑煮の出汁を引いてくれたり

自らはもう食べられぬ我が夫が雑煮の出汁を作りて呉れぬ

病院を外泊の夫作りたる雑煮の出汁は品よく哀し

大晦日独り想ふは夫のこと唯一無二の最後の出汁を

さはあれどこの想ひ出があればこそわたしは強くなれた気がする

年忘れ

大阪　伊藤忠男

荒に荒れ大谷パリも霞むなり歴史に残るこの年の年

この年は能登で始まり猛暑堪え「またトラ」過ぎてユンで締めるか

湯気の中揺れる湯船に横たわる今日は今年の大晦日なり

海水の温度高きが豪雪にこれもこれまた温暖化ゆえ

ファンダムに翻弄されし民主主義これも時代の一齣なりや

遅々として進まぬ復興能登の町日常戻るはいつのことやら

陰謀にフェイク告げ口思い込み隣国なればゆゆしことなり

寒風に晒され時に思い出す猛暑に耐えたあの夏の日を

この年の秋はちょいの間瞬く間夏から冬へ一足飛びに

冬空を勝手気ままなはぐれ雲風に逆らい右に左に

打って投げ走り拳を突き上げる大谷変えた野球の世界

列車内スマホ見る人８割に昭和の世界遠くなりけり

紅葉花短き命を惜しむのか風にあおられまた舞い上がる

見頃時期師走になりし紅葉花寒さに堪えて赤味増すなり

孫の顔まじまじ眺め「ちびまるこ」丸顔ちょぼ目減らず口

庭中改修（その十一）

豊川　白井信昭

垣根下花壇口元上り(あが)下り(お)一段づつを我確かめる

朝よりか遠く近くに不用品回収車の声風に流さる

通院の主治医の許しあり六回目コロナとインフル両腕に接種

夕食あと息子に送らる橋(はし)変わり堤防(ていぼう)を来て本線合流(ほんせんごうりゅう)

蜜柑狩り出遅れまいと朝支度早めに終えて妻と待ちおり

全通の早く待たるるバイパスの蒲郡ＩＣ(インターチェンジ)車の多し

インター過ぎ上り坂来て農園のオレンジパーク今し着きたり

売店のこむ受付に列なしてつき従える間の長しとも

現地にて樹脂籠(かご)一つ渡さるも開け口狭くこわごわ小さし

傾(かたぶ)ける段段畑石ざれの崩れし跡を外してゆかむ

ひたすらに捥ぎ取りながらいつしかに家族の姿見失う

段段畑上より順に見回りつようやく合えり妻孫息子に

帰る道遅き昼食レストランドリア懐かし家族と和(なご)む

生垣奥瓦礫下地に積み置ける上段踏台代わり

入出口花壇正面据え終えり幾度直しし踏台三段

元日や

埼玉　矢崎直人

開閉を心の扉自由自在少し世界を西へ東へ

落ちる葉をそのままにして残る幹冬の木立のただ凛と立つ

白湯のケトルの中に残っているお湯は白湯だと月を見て知る

一回目の目覚ましが鳴り二回目が鳴るまで寒し浅き夢視る

十二月最後の模試を受けてみて合格点の六割台で

冬の日やはじくボッチャの白い球ねらった赤と青の玉跳ね

枯芝を犬駆け廻る追い掛ける子どもの犬を追い掛け廻す

初富士や仕事に向かうバスの中まばらに座るバスの客なり

キャンパスの門前に猫三日かな人っ気のないバスロータリー

元日や静かな静かな夜なりぬ人も車も街も静かに

元日や猫が二匹で向かひ合ふ正月休みのスーパーの前

元日や星は輝きとりもどす街の静けさしみわたる道

隠された事実のあらわ物語琉球国の語りの中に

列島の飛び石のごと連ねらる物の語りは島から島へ

沖縄に語られをりぬ現在は日本の歴史の深き傷跡

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

施設へと揃ひて向ふ三姉妹車中はずつと母との思ひ出

稲吉友江

寒き夜は豚汁作りてほつこりと厨の隅に里芋の一つ

柿と芋それにお酒の一合も父の好物供ふる命日

なかなか揃って行けないのですが、今日は三人で行けました。それぞれの思い出があり、話して後はしんみり…。

カフェカーテンもう何年になるかしらもはやたやすく破れてしまふ

鈴木美耶子

北欧の森思はせるカフェカーテン私の窓にあと何年か

何花か小さき黄花こぼれ咲く車そろりと踏まぬやうにと

今回かけ替えたカフェカーテンは、数年前訪れた北欧を思わせるものに。かの日のフィンランドのようです。

乗り込みてノート広げる女学生立ちしままにて図形の問題

時々は上目になりて書き込みぬ朝の快速テストの前か

見守りのロボットは呼ぶ「まさえさん」会話が出来る日に幾度か

久しぶりの朝の電車は新鮮で、見回していたら、女学生がノートを広げたのも新鮮でした。

牧原正枝

なかなかに次のノートに出合へずに短歌ノートは最後のページ

新しき短歌ノートは飾らずに心のままを歌つていかむ

友くれしショットグラスはハワイの風しばし味はなしまはずおかう

見返せば、令和三年からのこのノートには、赤字で〈先生より…よくわかる歌を〉とメモが。ありがとう先生。

森厚子

大津より瀬田川下れば宇治の里わづか五里とは思はざりけり

ああ伊賀は忍びの里なりふと思ふ笑みを絶やさぬ老爺に会へば

なぜ我はここに居るかと問ふ母よ禅問答にいかに応へむ

自分の嫁した家に住みながら、毎日「家に帰る」と言う母との会話。頭と心は別物と諦めて接する毎日です。

水野絹子

静かなる熱田の森の門前に若者集ふ横丁のあり

何事もゆつくりになりしわれなれどその気になれば速く歩ける

豊作のはずの柿の実傷だらけ大量発生のカメ虫らしき

昔ながらの門前に人気の店が並び、若者の集う場所になって、私達年寄りが居心地悪い様な気がして！

牧原規惠

今日もまた愛犬チャコの浮かびくる首を傾(かし)げしかはゆき仕草

大寒の朝家族みな目覚めし時愛犬チャコは永遠(とは)の眠りに

チャコがなくなり一年が過ぎようとしています。やんちゃで困ることが多かったのに思い出す度涙が溢れます。

伊藤晴江

暮れ泥む豊橋の街病室の窓に見ゆれば懐かしきかな

拷問のやうな痛みだ五年振りの抗がん剤はわれを苛む

トトトンと二歳児の立てる足踏みが二階よりして令和七年

喉元過ぎれば熱さを忘れるで、すっかり忘れていた抗がん剤の副作用の関節痛。それさえ今となっては過去。

大武智子

現代学生百人一首

東洋大学

鈴の夏を連れだすその音は時をまたいで心やすらぐ

東京農業大学第一高等学校1年　**恩田　優奈**

ネット授業我が家のアイドルおでましだネコが届けた和やかな昼

練馬区立関中学校2年　**澤田　拓実**

時計地図写真音楽お財布も気づけばみんなスマホの中に

普連土学園中学校2年　**赤間　夏妃**

マスク消えみんなのかおが見えるときはなせるのかな今まで通り

普連土学園中学校2年　**川本　美瑛**

いびきかき寝てる愛犬ながめると実感したよ飼い主に似る

文京学院大学女子中学校1年　**佐藤　杏菜**

ズーム中ミュート忘れて歌うたいさびしい授業わらいあふれた

明星高等学校2年　**橋本　大和**

難問を解いたチョークの消し残しどこかアイツのやさしさがある

神奈川県立神奈川総合産業高等学校3年　**大竹　恭平**

文化祭二年連続オンライン慣らされていくこの空気感

慶應義塾湘南藤沢高等部2年　**石川　胡桃**

『俳句』

繰り返す挨拶長しあいの風　植村公女
故郷や同じところに羊蹄花
これからは誰の卒業机かな

目覚めても無明長夜の冬の闇　木村歩歩
電線に水滴の列冬の朝
万両の実を結ばんや喜寿の朝
日向ぼこ喜寿の祝いも砂時計
冬空に銀河鉄道どこまでも

十尺の雪とや酸ヶ湯肘折に　今泉如雲
珍しき人ふらと来し五日かな
文机に竹の定規や冬灯

冬の日やはじくボッチャの白い玉
枯芝の犬追いかける子どもたち
初富士や仕事に向かふバスの中
元旦や猫が二匹で向かひ合ふ
元日や星は輝きとりもどす

矢崎直人

冬の景どこにも無(む)フロリダ半島
大西洋水平線の夏日より
冬安居夏安居のごっちゃ混ぜ
いま秋といふ説にも従ひぬ
冬ぬくし大西洋の磯砂に
思い出す悲しき出来事夏の日に
足跡を消し去る波よマイアミビーチ
一歩一歩地球を歩む夏休み
幾条か真夏の光射しきたり
恒星も惑星もあり夏の日

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

彩鳥の羽を休めて水面映え　木風

三渓園菊を並べて日の光

午前九時冬の日まぶしふとん干し

子供らに足で蹴らるるこたつ猫

冬の鷺町の小川に居着いたり

行く歳を惜しむか西に月五更

満月や今年最後の満月や

日は暮るる寒の我孫子の停車場よ

初日の出七十の坂上り詰め

鏡池水面に映る紅葉かな　郷泉

小春日や休み休みの街歩き　春山

信濃路の落葉松（からまつ）落葉日に光る　順子

帰省して旧交の友山不動

吟深し神無月の絶句かな　雅風

秋惜しむ湖畔にしみこむ李白吟

寒の入り五言絶句の息白し

散歩道日毎に変る紅葉かな　菱泉

山眠る石段昇り安楽寺　恵風

ほし月夜おち葉が泳ぐ露天風呂

バスツアーはるかかなたに雪の富士

年老いてひざから腰へ痛む秋　雄山

秋風に吟の楽しさ友を呼ぶ

勝沼は桃色に染まる春間近か

親戚のみやげ楽しみお正月

折々の詩（十二）

ふじの　けんじ

ことばの奥へ

言葉の美は
同じほど尊い
沈黙の裏打ちがある

詩は特に
桜の花そのものではなく
葉桜に目を向けながら
沈黙に
語らせるいとなみなのかもしれない

そこには必ず

意味が　横たわっていて
別の世界の美を
教えてくれる

詩人は
意味の土壌を耕しながら
時には
自らを　肥料にしながら

その土壌にしか咲かない
言葉の花を
沈黙の花を
人々に届けていく
生きている限り

五感を澄ませば（32）

杉浦恵美子

風蕭々

燕の太子丹の依頼で秦王政（始皇帝）暗殺を依頼された荆軻が、易水のほとりで見送る者たちに別れを告げる際に作った歌

風蕭蕭兮易水寒
壯士一去兮不復還
風は蕭々として易水寒し
壯士ひとたび去りてまた還らず

「荆軻の門出を知った太子をはじめ賓客たちは、みな白装束（喪服姿）で、易水のほとりまで見送った。荆軻は親友高漸離の奏する筑に合わせて悲壮な声調で歌った。見送りの人々は涙流さぬ者とてなかった。荆軻は車に乗った。もはや二度とふり返らなかった。

ついに荆軻は、秦王の側近によってとどめを刺された。前二二七年のことである。政が天下を統一して始皇帝となったのは、それから七年後のことである。」『**史記**』『**戦国策**』

この易水の別れの場面は、史記・列伝の中でも劇的な名場面とされているとか。

そのせいか、この句に接してから、ふとした時に口を衝いて出て来ます。

これだけの句なのに情景がありありと浮かんで来ます。

実際にこんな場面があったのか、本当に荆軻自身がこのように歌ったのか、定かではないのに。

史実では、荆軻の予言通り、易水で皆と別れたあと、二度とは戻って来ません。殺されてしまうから。

つまりどんなに悲壮な覚悟での旅立ちだったのだろうかと。

また晩秋から冬の荒涼とした易水のほとりが背景であるからこそ一層悲劇的です。

ある解釈では、「流れる水は、たえず過ぎ去り、戻ってはこない。この水の流れに己れの今を重ね合わせるのである。ここに悲愴感が強烈に意識される」と。

文字にして僅か十五字なのに、無駄がないうえこの深さ。

一人の壮士の生きざまが、二千年以上隔てて蘇って来ます。

この歌に着想を得て、与謝蕪村が

易水にねぶか流れる寒さかな

と云う句を詠んだとか。「ねぶか」とはネギのことで、透明感のある水の流れ、凍えるように冷たい水面を白いネギが流れていく。

蕪村の句は主情を抑制し、「寒さ」という感覚を視覚的に表現することで客観的、絵画的になっているところに特色があると。

普遍性のある作品は後代の芸術家にも多大な影響を及ぼすものですね。

ところで「十年一昔」とか「十二支一巡り」と云いますよね。

今年50歳と60歳の知人がいます。

50歳の方は「五昔」経たのか、60歳は還暦（干支一巡）だから十二支五巡したのか、と下らないことを考えました。

しかしたとえ寿命が百年としても、我々はせいぜい十昔、十二支八巡位しか過ごせないんですよね。

わたしがこの地に戻って、もう十年一昔も十二支もとっくに過ぎました。

自分の周囲では気付き難いのですが、以前住んでいた処に行ってみると、一目瞭然。昔の面影はすっかり消えていて、ああもう此処に自分の居場所はないんだと淋しくなったりします。

ところで、ある調査によると、今のZ世代には、「五～六年」が一昔という感覚だそうです。

結局、何が言いたいのか分からなくなって来ました。

強いて言うなら、方丈記の冒頭のところでしょうか。

ゆく川の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず

と

世の中にある人とすみかとまたかくのごとし

の関係。

自然や月日は悠久だけれど、そこに住む我々には十年一昔が数回ほどの仮の世に過ぎないと。

そしてこの歳になると「一昔」に埋もれた想い出により愛しさを感じます。

風蕭々仮の世なれど一壮士後姿は千歳の幻

附　録（三十二）

矢　崎　直　人

枯芝の犬追いかける子どもたち

芝が枯れて茶色になりました。犬がその上を掛け廻ります。そして、子どもたちが犬の後を追い掛けて走り廻ります。小春日和の公園の午前中は柔らかな冬の日射しの中、風が穏やかな日でした。

枯芝を犬駆け廻る追いかける子どもたちの犬追いかけまわす

初富士や仕事に向かふバスの中

二〇二四年、二〇二五年の元日は仕事に行きました。バスは運行の時間が変更になります。それでも乗客が全くいないということはありません。通勤途中のバスの窓から富士山が見える場所があります。特に冬は晴れていると綺麗に見えます。初富士が見られました。

初富士や仕事に向かうバスの中まばらにすいたバスの客なり

元旦や猫が二匹で向かひ合ふ

元日はスーパーマーケットも休んだ所が多かったようです。明かりの消えたお店の前に二匹の猫が向かい合って座っていました。猫たちに正月はないでしょうが、人の動きがない所では、猫のような動物が悠々と過ごしているのかもしれないと思いました。普段とは違う日常の一コマに気がつきました。

元旦や猫が二匹で向かい合う正月休みのスーパーの前

元日や星は輝きとりもどす

元日の夜は街が静かに思えました。人や車、街の明かりが少なかったです。静かな街の夜に幾億光年の星の明かりが届きました。

元日や星は輝きとりもどす街の静けさしみわたる道

『大河ドラマ』

中屋保之

また新しい『大河ドラマ』が始まった。物語は18世紀も後半に差し掛かる「江戸遊郭・吉原」辺りを舞台としてスタートした。早速ＳＮＳとやらで、やれ視聴率がどうの、俳優の出来がどうの、冒頭のＮＨＫらしからぬ映像がどうの、と喧(かまびす)しいことこの上ない。他人(ひと)それぞれの楽しみ方で、そう目くじらを立てることもなかろうに、と思う。

元々は娯楽番組であることから、歴史的な物語が取り上げられることが多い様であるが、たまに、視点を変えて〝経済的背景〟から描いた『大河』もあった。私は、「峠の群像」がそれに当たると思っている。「団塊の世代」命名者の堺屋太一氏の原作であったと記憶する。今回の「べらぼう」は、始まったばかりでどういう展開になるかは定かではないが、江戸時代に、出版という「物」を流通させることで〝経済効果〟を発揮してゆく蔦屋重三郎の成長過程を描くドラマであろうと期待している。

また、出演の役者さんたちがそれぞれの「役」を通じて成長を遂げてゆくのを実感するのも楽しみの一つとしている。主人公は言うに及ばず、これはと思った脇役の俳優さんが私の予想に違わない活躍をした時の〝してやったり〟感は視聴者名利に尽きる。だから何だ・って話しだが・・・

前作の「光る君へ」の主人公を演じた吉高由里子さんは、当初のぎこちなさげな姿がどんどん変化してゆき、紫

式部そのものになりきったように思える。特に、元々左利きだったのにも拘わらず右手を使ってのあの仮名文字の素晴らしさといったら、感嘆に値する。脇を固めた俳優さん、特に中宮役をはじめとした女性たちには見応えを覚えた。中宮定子が清少納言に下問する場面があった。

雪のいと高う降りたるを例ならず御格子まゐりて炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらうに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

〝日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し〟で始まる白居易の律詩「香炉峰下の山居」を、この時代の宮廷人は教養として持っていた、という事実に感心した。と同時に、それを演じ切った二人の女優さんも見るものをその場に引き込むような気にさせてくれた。また、タイトルバックと一緒に映る《男女の手》の美しさも印象に残った。こんな視聴者もいるのである。これまた、だから何だ・って話しだが・・・

昨今、〝余計なお世話〟的ＳＮＳが横行しているように思われる。たまにはこんなＳＮＳで一服を。

『酔いの徒然』（一五四）

丸山酔宵子

『京都の大晦日と新年のお雑煮』

「ゴーオーン・・・、ゴーオーン・・・」

八坂神社の方向から除夜の鐘が聞こえてくる。しんしんと冷え切った京都の大晦日。知恩院の除夜の鐘である。「えーい、ひとーつ」「そーれ」の掛け声で、親綱と子綱を17人の僧侶が、体を反らし、心を合わせて、将に一打そして一打、全身に力を込めて打ち鳴らしているのである。打つ数は人間の煩悩の108つ。

えーいひとーつ煩悩払ふ百八つ

酔宵子

ここ数年、年末年始は京都で過ごしているが、コロナ以降は外人観光客が殺到し、ホテルも取りにくくなり、1年前には予約が必要となっている。

令和7年元旦朝、三条河原町のホテルで目を覚ませば、新春の太陽が京都のしっとりとした町並に優しく降り注ぎ、今年は一段と輝いている。

元旦の朝の恒例は、四條河原町『志る幸』での「お節とお雑煮」である。　四条河原町から木屋町に向かう小路を入った一角に、黒塀の落ち着いた町屋風の建物がある。横の細い飛び石の小径には、幕末勤王の志士「古高俊太郎の邸宅跡」の石碑があり、京都らしい風情を醸し出している。

店名の「志る幸」は、滅私倹約が求められた平安時代からあった風習の「汁講（しるこう）」が由来である。「汁講」とは、客が各自ご飯を持ち寄り、主宰者は汁物を準備して「おもてなし」をすることで「一杯の汁におもてなしの気持ちを込める」という精神が受け継がれているそうだ。

10時前に三条河原町のホテルを出て、元旦の朝日を浴びて川面がキラキラ輝いている木屋町高瀬川沿いに、

朝の散歩がてらゆっくりと歩いて行く。

「志る幸」のある小路に着くと、もうすでに入り口には行列ができている。通常営業は11時30分であるが、正月は例年通り早く開店するとのことで常連客が心待ちして待ち構えているのである。

元朝の光眩しい高瀬川

酔宵子

暫く待っていると、暖簾を持った女将が白木の戸を開けて、暖簾を表の桟に掛けて、「お待たせどす・・・。どうぞ・・、お入りやす・・・。」

店内は、白木をふんだんに使った「能舞台」の様な作りになっていて、客席が舞台に向かって設(しつらえ)てある。能舞台は広い白木のカウンターになっていて、脇には灘の銘酒白雪の新しい堂々とした、いかにも新年らしい大きな薦被(こもかぶ)りが置かれている。

能舞台の、将に、かぶりつき席に座って、先ずお正月らしく熱燗を注文し、名物・利久辨當を注文する。鶏肉・焼き魚・お豆腐・わらび漬・胡瓜漬・たくわん・瓜漬、それにかやくご飯が上品に漆のお盆に乗せられている。味付は、京都らしい、薄味で、素材を邪魔しない。

お正月のメインディシュのお雑煮は白味噌、赤味噌、おすましの3種類から選べるが、京都らしさを味わうなら上品な甘さが特長の「白味噌」がベストチョイスである。

白味噌のお椀の底には極(き)めの細かいお餅が2つ。

白味噌の汁にお餅の初雑煮

酔宵子

元日の佳き日、灘の銘酒白雪を朝から堪能し、表に出ると、店の前には長蛇の列ができていた。

「志る幸」は昭和7年（1932）年創業で、数多の京都の粋人、文化人に愛され、特に司馬遼太郎がお気に入りであったそうだ。

花よ　風よ　光よ

高橋育郎

一　百合にスターチス　かすみそう
南国高知は　のどやかに
色もとりどり　花々が
いつも咲いてる　よいところ
見せてあげたい　みんなにも
翼に乗せて　くばりたい

二　みかん八朔　柿に栗
枝もたわわに　実を結び

若い笑顔が　満ち満ちて
甘い香りを　運んでる
分けてあげたい　みんなにも
高知の風を　届けたい

三　きゅうりピーマン　なすにニラ
高知の大地よ　ふるさとよ
四季を通じて　採り入れの
喜びの歌　うたってる
聞いてほしいな　みんなにも
高知の光　おくりたい

絹の話（171）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

蚕よ、お前もか！

蚕は工場で育てられる時代が来ている

蚕も農家の人が手間をかけて養蚕するのではなく、キノコと同じ様に養蚕工場で飼育される様になりました。養蚕工場とは温度湿度の管理された無菌室で人工飼料により季節を問わず通年養蚕をする事です。

それは桑の葉を食べない蚕の育種によって、桑の葉の粉末を使った高額な人工飼料より安価な人工飼料が出来る事よって成功に至りました。

この事業の目指すところは蚕＝絹を作る、インターフェロンや試薬実験昆虫として利用するからシルクゲル、パウダで化粧品やサプリメント（血糖値低下）、さらに人工骨や皮膚にも役立て、動物性蛋白質の最も効率的な製造システム（30日で1万倍の蛋白質製造）として牧畜、漁業に代わる産業にもなろうと言うもので、無重力状態での蛋白質製造にも蚕が注目されています。

しかし、蚕が家畜化されればされるほど絹特有の深い艶や地域的、季節的特性が失われて来ています。

今日では能、神官などの伝統的装束の制作には古代繭を養蚕して取り組んでいます。

均一化する世の中

類人猿の中でも冒険心に富んだホモサピエンスは地球の隅々にまで拡散し、わずか（2万年）の間に植物の野菜化、動物の家畜化、蚕のなどの昆虫の家畜化にも成功し、人類の衣食住の生産革命を成し遂げて今日に至りました。今後は第二次生産革命に入って行きます。

それは野菜も魚も家畜も自然光を浴びない工場の中でニーズに応えた色やサイズの物を季節を問わず安く早く世間に供給する体制です。これらの販売促進は新聞やテレビなど旧来の情報産業から新しい情報産業が推進する事になり、情報発信の仕方で味覚も操作され、多くの人が同じ様な素材や色の物を着て同じ様な家に住む事が進行する様になるでしょう。

画一化がもたらす生存の危機

昨今の日本では高度成長時代の多種な素材で華やかな色彩豊かな衣料品は影を潜め、均一的な化学繊維で「黒」中心の衣料品に変わり、食生活も全国規模のスーパーなどにより人口的で均一な品になって来て、季節の山菜どころか野菜の旬もなくなり、ホロ苦さや独特な香りは返品の対象になって来ています。

この様な環境では素材や色彩、味覚による多様な思考

と行動が失われ、個性的な思考は育まれなくなるのではないでしょうか。一定の紫外線に当たって雑菌に囲まれた環境の方が健康的ではないでしょうか。

人類の発展

昆虫は何千万年もかけて小型化（省エネ）と早い生命回転で環境に順応した個体に変化し、今日地球上で最も繁栄した生物となりました。人間とはっ違った「時間軸」を獲得したのです。人類も地球上の温度変化（２℃～５℃）による民族移動で多くの種族が離散集合する中で繁栄するエネルギーを育んできました。文明の衝突とでも言えるでしょう。それにより人間は物理的時間軸と心の時間軸（宗教）を得ました。

縮んで行く国、発展してゆく国

衣食住、色彩までもが画一化されて来た今日の日本は人口密度が高くても、互いにすれ違う人の間に生まれるエネルギーが小さくなって来たようです。

それは少子高齢化という現象にもなって現れ、国全体が縮んで行っているのではないでしょうか。

思えば日本での最初の大きな文明の衝突は気温の低下に伴う縄文化人の東北地方からの南下と稲作文化を持った弥生文化の南からの北上で大きな摩擦を生みながらも常に新しいエネルギーを生んできました。

それが一段落してはや二千年数百年経過した今日、日本人のＤＮＡに劣化が始まって来ていないでしょうか。中国もインドも日本よりはるかに古い国ですがまだまだ多くの離合集散が控えています。

アメリカは離合集散が始まったばかりで、その熱は五百年後位から花が咲き始めるでしょう。

蚕が教えてくれる事

人々は絹糸昆虫が短期間に生存方法を環境に適応するように変化させる事を利用して、人工昆虫たる蚕を作ってきました。ところが人類は蚕ではありませんので、環境が著しく変化しても環境の脅威には移動する位の事しかできません。人の利便性を促進するものでも著しく環境変化をもたらす産業は排除しなければならないでしょう。利便性の取捨選択を迫られる時代が来ています。

※新年号の絹の話１７０の訂正

・Ｐ48王韓とその時代・４行目　北方からの匈奴→突厥
・Ｐ48酒泉とは・１行目　涼州でも東→西
・葡萄の美酒Ｐ49・４行目　シルクロードの東の終点よりさらに北東→西の終点よりさらに西
・Ｐ49夜光の杯・２行目　酒泉のさらに東のホータン→西のホータン

「江上浩二の独り言」86

江　上　浩　二

新春雑感２０２５

事の起りは、令和7年元旦の早朝のことで、YouTubeで3代目桂三木助氏の芝浜という有名な落語を聞いて、少し庶民の気持ちを晴れやかにしてくれていて、間をおいて観始めたＴＶ番組である。それはＮ放送の何とか徳島というタイトルで既に始まっていた。見始めると直ぐに、徳島県の四国お遍路第11番目の寺が紹介され始めていた。

なぜかこんなことを思い出し、大学４年の卒業式を済ませ、大学院の入学式をまじかに控えた約50年前のサイクリング四国１周（約１０００㎞）の初日に東京有明ターミナルの徳島行きのフェリーに夕刻にサイクリング車と乗船した。翌日昼間に小松島港に着き、走り始めて当時四国は未舗装の幹線路も多く、直ぐにタイヤがパンクして、修理をはじめていた。こんな小さな釘が刺さっていたのだ。これを凶と見るか吉と考える暇もなく、また自転車こぎ始めて、今晩泊るところは確か板野町のお遍路さんに組み込まれたお寺だと言う事でひたすらに、こいで初日の宿に到着した。

当時は輪行の友は縮尺５万分の一の地図で、それを自分が踏破するルートに沿って買い集めておくことと、宿は主にユースホステルだったので、その小冊子（電話番号が記載）の２つであった。

そのＴＶ番組では、時間に余裕のある方は四国霊場88カ所を徒歩でいくという、次ぎの霊場迄7時間も掛けて歩き、途中で難儀している高齢者に遭遇すれば手を差し伸べ、歩を緩め同行するという素晴らしい紹介をされて、さらに50年前の当時とは違い、綺麗でモダンな宿坊も紹介されていて、異国のからも多くの参拝者が来られ、東京京都大阪と言ったシティ派とは違う日本文化を享受している方々を取り上げていた。

私の50年前の様子は、お寺さんの宿坊３か所、「徳島、四万十川沿いの中村という町にあったお寺さん、そして室戸岬の崖の上にあるお寺さん」で、後はユースホステル３軒と港町の民宿（四国の最西端の佐田岬手前の三崎町）での１泊であった。私の輪行は７日間で約１０００ｋｍの距離で、１日で１００㎞、長いと１５０㎞位迄、半日で80㎞程度の走行。道路の路面状態（未舗装で砂利道、上り下り、山道とか）や天候に大きく依存した。平地では雨降り、標高３００ｍまで上がると雪にも、四国の松山で、４月早々で遭遇するという天候だった。

Ｎ放送の番組でフォーカスしていたのは、確かに50年

前もいらした各お寺さんで戴く御朱印帳め、急ぎの為タクシーを利用する方々ではなく、日本文化をゆっくりと体験してみようという趣きにあった。

私は、なぜ四国88カ所の霊場なのかと言う数字の８に惹かれた、88である理由、四国にはもっと沢山のお寺さんはあるのだが、、、

では、ＡＩ関係のネット調査を行うと、即座に次の囲みに記した解説を教えてくれた。

> 四国八十八箇所のお遍路さんが88箇所である理由は、弘法大師（空海）に由来するとされています。空海は四国で修行し、多くの寺を開いたり、修行の場所として選定したりしたと言われています。彼が修行した場所を巡ることで、心の修行や成長を象徴する旅とされています。（中略）88は仏教の修行階梯を象徴する数字とされ、それに基づいて88箇所が選ばれたとされています。

中国では⑧はいい数字で、吉だそうだ。北京オリンピックは暑い最中の２００８年８月８日を開会式にリザーブするぐらいの国家行事としたぐらいであった。

これは未だ公に紹介したことはないのだが、私が幼稚園児の歳に親以外で初めてもらったお年玉が昭和３３－４年の頃で真新しい10円硬貨で80円だったこと、もし、くれた祖父祖母が、８が縁起の良い事を知っていて、お年玉としてくれたのかと大人になってから長年の疑問がくすぶっていた。数年が経ち小学校の低学年の時の祖父祖母からのお年玉は金ぴかの１００円玉で２－３００円だったと記憶しています。今、金が１ｇで１万数千円もするので、当時の稲穂が彫られている１００円硬貨は銀貨と言われるくらいで銀の含有量が多く、余談ですが現在の価値は〝３００円〟超えることが計算でわかります。

そろそろ終わりにしたいのだが、落語で芝浜という有名な演題の事も疑問があって、魚屋の主が江戸の芝浜（現、品川から浜松町あたりの海岸）で皮の財布をひろって、中身の銭の総額が82両という大金であったことを思い出し、⑧にこだわっている私の気持ちが、なぜ芝浜で拾った銀の粒が82両分（小判82枚でないのだ）なのかということも、ネット検索したところ、落ちがありまして、噺家によって、財布の中身は50両や42両という具合に変わっているそうで、ちょっとした額を拾ったのではなく、江戸の当時の大金であること（１年以上も暮らせる）、番所にも届けず隠しもっていて、庶民がビクビクしながら、何かと周囲を気遣って暮らし通せる金額の範囲であれば良かったそうである。

初狩便り（39）

花野みぷり

ほたる再生プロジェクト　その４

寒の入りの一月五日、笹子川の手作り取水堰に仲間が集まった。鉄杭、竹、筵（むしろ）、スコップ、鶴嘴（つるはし）を持って。

昨年から始まった「ほたる再生プロジェクト」で、ほたるとカワニナを水路に放流した。そのため冬の間も水路に水を流し続けなければならない。ほたるの幼虫は水のなかでカワニナを捕食し、脱皮を繰り返しているはず。水がなくては生きていけない。

初狩は降雨量の少ない土地柄だが、十一月の中旬から二か月半も雨が降らなかった。笹子川の水量がどんどん減り、取水する水量も激減した。十二月七日に取水堰の補強をしたが、もう一段の工事が必要となった。

水路に水が流れるように、川底の砂利を掘り起こし、鉄杭と竹と筵で堰を補強した。寒中の笹子川の水は凍るように冷たい。奮闘一時間半、水路に水が回るようになった。よかった。春彼岸が過ぎれば、雪解け水が迸（ほとばし）る。

まるで寒行のような作業だったが、心は温かい。初狩小学校のみんなと笑顔の田んぼの仲間たちと、ほたるを見る日を楽しみに、霜の畦道を歩く。

（写真　菅野昌英・矢野都紀子）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2025年1月8日

姿勢の問題

ここ最近の雨で
湿度が上がり空気が優しく感じました
植物達も生き生きとします
お正月明け
普段の生活リズムではないので
いらっしゃる患者さんの
身体の方もいつもと違う感じになっています
特に多いのは
首や肩のはり痛み
背中のつり
腰の痛み
胃の痛み
頭痛
などなど
一見普段の症状の様ですが
原因は随分違うものになっていたりします
身体をゆっくりと動かし
伸びをして背中が丸くならない様にしましょう
もちろん
3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分＋湯船
引き続きやっていきましょう
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2025年1月10日

咀嚼を意識して

天気予報によると
今週末は気温が下がるそうです
引き続き　手洗い　うがい　マスク
でウイルスから身体を守りましょう
お正月明け
首や背中や腰の痛み
胃腸の不調
片頭痛などの症状が出やすくなっています
そこで
食事の量や種類を軽めにするのをお勧めします
お正月
どうしても普段より量が増え
重い食事の種類が多くなります
そうしますと
その食事が普通になり
量も増え　満腹感を感じにくくなります
ですので
腹八分
就寝2～3時間前までに食事をすます
などをしていきましょう
後は
良く噛み　ゆっくりと食べましょう
水分補給も忘れずに
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「意識は過去の積み重ね」

人は動いて生きる中
生命が反応したモノを
記憶に留めて　蓄積し
自分の好きや嫌いなど
踏まえて　自我が出来てきて
その積み重ねで　その人の
意識が発達して行くもの

どの様な環境で生きて来て
どの様に　頭で思考して
どの様に　発言・言葉にし
どの様に　動いて・行動し
生きて来たかが　その人の
自我・意識となり生きていく

意識は過去を積み重ね
思考が一つの型となり

人の　生き方作り出す
人と和して　愛すれば
その自我　得を積み重ね
人と反して　断絶すれば
その自我　悲哀を積み重ね
思いとこだわり　強すぎリャ
その自我　業を罪み重ねる

どんなに不幸に生きてても
生き方　幸にしたければ
今から動きや環境を
少しづづでも変えていき
人と繋がり　ぶつかって
小さい調和と喜びの
経験増やせば変わってく

意識は常に書き変わり
良くも悪くも　新しい
自分を作りて生きていく
新たな思考と行動で
新たな未来へ動きだしゃ
新たな自分に書き変わる

「お肌と皮膚と潤いと」

お肌の若さは　気の若さ
お肌がしっとりと潤って
張りと温もり　あるならば
若さと代謝が　手に入る
人の若さを　維持するにゃ
お肌の健康　肝要じゃ

皮膚は栄養　通る道
経絡気血が　めぐる道
めぐる気血が　順調ならば
各所に栄養　届きまし
老廃物は　除去されて
肌の機能が維持される
皮膚に気血がめぐるなら
お肌は潤い　強くなり
外の異物や細菌などの
邪気から　身体守っている

皮膚の乾燥　放置して
潤い・温もり　無くなれば
気血の通りは　悪くなり
お肌の　衰えはじまって
老化の道へとまっしぐら
皮膚が乾けば　カピカピし
お肌の潤い枯れていき
見た目にゃ　シワが増えていく
ガサガサ粉吹き　白くなり
過敏になりて　痒さ増し
炎症すすんで　全身各所
免疫力が乱れてく

お肌と皮膚の健康は
適度に運動　温まり
じわりと汗かきゃ　皮膚潤い
ゆっくりお風呂に入るなら
お肌の保湿が進むなり
お肌と皮膚の潤いを
維持すりゃ　老化は先延ばし
若さはお肌で作られる

台上偶作

畢竟師を思うに帰す

横山精真

西に富嶽を望めば　白峰清く
東に暁光を仰げば　蒼極晴る
黄葉は風に揺れ　庭樹麗しく
偶語を為さんとすれば　幽明絡がる

臺上偶作　畢竟帰思師　令和六年十二月二十四日

西望富嶽白峰清　東仰暁光蒼極晴
黄葉揺風庭樹麗　欲爲偶語絡幽明

（語釈） o台上…台はテラス。o畢竟…結局。o蒼極…広い青空。o偶語…二人向かい合って話す。o幽明…あの世とこの世。

（通釈） 西に富士山を見れば真っ白い稜線が清く、東に朝日を仰げば空が晴れ渡っている。

黄葉は静かに揺れて庭樹の桜木は麗しい。大恩人を思えばあの世とこの世が繋がる。

※　昨年の師走は何と晴れの日が続いた事だろう。でもそれは、この横浜に限る事であったかも知れないが。風も静かな日が多かったし、こんなに良すぎる天気が続くと来年はどうなるのだろうと心配にもなったものだ。兎に角、長い夏日と熱帯夜で随分悩まされたのだから。それにしても本当に気持ちの佳い日が続いた。テラスの眺めと雰囲気は最高であった。

好天をそのままにするのは勿体ないと詩作を試みた。吾が師を思う形で結句とした。心安らげば恩師を思う。テラスで詩作して何と多く恩師の事を述べたのだろう。

朝夕は恩師や祖宗範の写真その他に手を合わせて一日を送るのが定まってきている。一年に一度は九州に帰り、ついでに酒を飲む事を楽しみにしてのお墓参りがお定まりとなった。常に恩師の事を偲んでいる事は事実であり、何かにつけて恩師への思いになるのが自分としてはごく自然でもあるようだ。五十年来の知人も恩師あっての事。

社会人一年生で間もなくご縁を戴いた事は自分の人生が新たにそこから始まったも同然だから時を経るほどに重みは増す。一方年齢を重ねてくると実に寂しい思いが強くなる。ましてや恩師には、もうお話を聞けたり、お電話や拝顔してご報告する事は出来ないのである。是れが人生と生きるしかない。

（令和七年一月一日記）

o 冬の青思うて遠き彼の人は　　o 牡蠣ひらき有難きかな五十年

編集室だより【二〇二五年二月】

今泉由利

歌集「地球にて」

一九七九年

ペソで買うオレンヂの価換算を幼子とする一個十円
両の手にわが子を抱き逃げるさま異国住まいの潜在にあり
鼻丸き面を買いたるニカラグヮの飲料水なき戦の記事
吐く息の白きこの朝うれしくて私に吹きくる南極の風
大小の裸像の廊を通りゆくプロフェッサーマキに初めて逢はむ
無造作に置かれし裸像の大きくてパロサントの横に席をつくりぬ
跳躍の練習なりとは言はずしてオンブーの実に幼子は跳ぶ
折り紙の切れ端も捨てざる幼らは見ぬ祖につらなりており
スペイン語と日本語とを織りまぜてようやく割り算の答いでたり
何の実の種まじりいる鳥の糞乗馬ズボンの我に降りくる
日本へは行くアルゼンチンへは帰るよと言いつつ寝たり私の幼子
氷山の間をぬいてはるばるとわが窓に来る南極の風
何万キロ運びきたりし八丁味噌千六本の汁はうまいよ
教えてはやれないことが日々に増す吾が子はアルゼンチンの小学二年生
手も足もわが身にありて健やかなり正しき姿を描くは難し
何事もなく過ぎてゆく一日も書き残すこと次々にあり
一年の日々を重ねて今日のためベゴニアデクレオパトラの花茎高し
私より巨き女を描きゆく金髪のあたりは背のびをしつつ
和訳をすれば〝ささやき〟などと名ずくべき黒き馬にまぎれておりぬ
明日には忘るることを悲しめる幼子は習う曜という字を
わけ知らぬ六歳の子にも聞かせむとアンドレスセゴビアの前に坐りぬ
熟しゆく種子を梢に保ちつつ冬の日に立つハカランダ木
盛り上げし陶土をナイフにて削りゆきアマリアの姿を造りいださむ

イギリスにて炭と焼かれし小枝もて裸婦の姿を描きゆくゆく
一センチ切れば心も顔つきも異りて見ゆる私の黒き髪
炎と見ゆる大樹もわが家の鉢植もともにオンブー新芽たちくる
何ということはないけれども棚に置きて駝鳥の卵一つうれし
ガラス戸にわが体温の移りゆく葡萄の幼芽を見ている間にも
何よりも好きな物よと名を上ぐるチリモジャ緑に逢うんは二度目
箸よりも細く小さな椿なれど従いており四季のめぐりに
向いあうビルを履い隠すまで育てよベランダの私のオンブー
木々の芽の出はじめてより風強き日の多くして心疲るる
雲を割る光の線の素早さを好みておりぬ幼き頃より
雪の如く天を覆いし蝶の群離れし一匹標本となる
鼻筋を高くとおして落付きぬ陶土につくるアマリアの顔
わが塑像なおさるること多くしてマキ先生の体温残る
見ゆるもの見ゆるそのまま描くことこの難しさいつまで続く

日本より伝わりきたる映像に紙吹雪散るアルゼンチンの街
距りているとも思えぬに太陽の側のコーヒーの木のびのびと立つ
紙縒作る日のまた来るは忽ちにて和紙など探すうろうろもまた
逆光に若葉ブドウ葉透きてくる朝の光の中のしばらく
青インク吸わされ伸びくる小豆の芽幼子の実験七日目となる
シャッターをおろす前にもう一度たしかめて見る南十字星
緑濃き川根のお茶を飲む時に南米に住むを思い出だせり
わが話すスペイン語少きにありありと破られたり外国人と
オンブーの伸び物指持ちて確かむるこの朝々を楽しと言わむ
捨て置きしコルメナの鉢に花咲けば晴ればれ私の居間にとり入る
濃く淡く墨を水に遊ばせて視界に色のなきごとくいる
ひと枝の淡きむらさきを拾いあぐ栴檀の並木石畳道
根を曲げて盆栽となる筈の私のオンブー枝たくましき

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和七年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利